

2018年8月17日

2018年メキシコ歴史文化講演会

『日墨修好 130 周年記念講演会（全4回）』

メキシコ・日本アミーゴ会は日墨の友好親善の促進とメキシコの理解を深める目的で、「メキシコ歴史文化講演会」を毎年開催しています。2018年度は、日墨修好通商航海条約締結＝外交関係樹立 130周年記念行事の一つとして、「日墨修好通商航海条約締結とその後の日墨交流について」を主テーマに、4回シリーズの講演会を下記の通り開催します。みなさまお誘いあわせてのお出かけをお待ちします。

メキシコ・日本アミーゴ会

☆開催概要(各回共通)☆

日時：2018年9月6日(木)、10月1日(月)、11月9日(金)、12月4日(火)

18:00～20:00（開場 17:30）（講演 90分＋質疑応答 30分）

会場：駐日メキシコ大使館別館 5階「エスパシオ・メヒカーノ」

定員：先着順 100名／参加費：無料

主催：メキシコ・日本アミーゴ会 / 協力：駐日メキシコ大使館

申込：メキシコ・日本アミーゴ会 (info@mex-jpn-amigo.org) へ「講座名・参加者氏名(フリガナ)・メールアドレス・所属(アミーゴ会員か否か)or 案内入手源」を明記してお申し込み下さい。なお、詳細はHP(<http://www.mex-jpn-amigo.org/>)参照。

[講演テーマと講師]

9月6日(木) 第1回「メキシコと日本:外交関係の130年」

講師：カルロス・アルマーダ 駐日メキシコ大使

講演概要：今から130年前の1888年11月30日に日墨修好通商航海条約が締結され、両国の外交関係の礎が築かれました。メキシコにとって日本はアジア諸国で初めて国交を結んだ国であり、また西洋諸国として日本と平等条約を締結した最初の国がメキシコでもあります。この意味において、同条約の締結が国際社会の一員としての両国にもたらした影響と重要性については強調してもしすぎることはないでしょう。1888年の記念碑的事業の実現にあたっては、世界史的そして外交的要素、なにより多くの偉人たちの熱意が関わっています。とりわけ、1874年の「金星の太陽面通過」に際しメキシコ観測隊長として派遣されたフランシスコ・ディアス・コバルビアスが残した調査報告書、その中で対日関係強化を提言したことが後に大きな契機となっていきます。

国交成立後も、メキシコと日本の両国関係は産官学を挙げた制度的連携だけでなく、民間や個人レベルの交流を通じて深められてきました。1913年に起きた「Decena Trágica (悲劇の十日間)」に際して、時の在メキシコ臨時代理公使であった堀口九萬一がマデロ大統領の一族を日本公使館で避難生活させた英雄的行為や、1923年の関東大震災の際にメキシコ政府が日本政府へ行った援助など人道的エピソードは枚挙にいとまがありません。また1954年に「日墨文化協定」が調印、1971年には「日墨研修生・学生等交流計画」の発効、そして2004年には「メキシコ日本経済連携協定」が締結されるなど様々な分野での戦略的提携が強化されています。

[言語：スペイン語－日本語逐次通訳]

10月1日(月) 第2回「日本とメキシコ:日墨友好130年の歩み」

講師：柳沼 孝一郎 先生(神田外語大教授、副学長)

講演概要：鎖国政策によって途絶えていた日本とメキシコの関係は、明治7(1874)年に来日した「メキシコ金星天体観測隊」を機に再開された。地理学者で隊長のコバルビアスは報告書『メキシコ金星天体観測日本旅行記』のなかで、急速な発展をとげる日本を考察・分析したうえで、日本人がいかに勤勉で礼儀正しいかを強調し、日墨間の直接貿易および外交関係の樹立を力説、1888年(明治21年)11月30日に米ワシントンにおいて「日墨友好通商航海条約」が締結された。日墨条約は明治政府の悲願であった完全対等平等条約であり、その結果、条約改正が達成された。それは日墨外交の伝統そして歴史遺産として高く評価される。

今回は、その延長線で実施された1897年(明治30年)の「榎本武揚メキシコ殖民団」を起源とする日本人メキシコ移住の歴史、戦後における両国の政治・経済・文化交流の変遷をたどり、日墨友好130年の歩みを考えます。

11月9日(金) 第3回「メキシコと国際貿易 ～日米との関係を中心に～」

講師：所 康弘 先生(日墨交流会会長/明治大学准教授)

講演概要：2005年の日墨経済連携協定の発効後、両国の貿易・投資関係は劇的に変化してきました。その関係は環太平洋パートナーシップ(TPP)協定の合意を経て、新たな段階へ突入する予定でした。ところが、いまやトランプ政権が進めるNAFTA(北米自由貿易協定)の再交渉問題に、当事国のメキシコのみならず、日本も大きく揺れています(2018年6月時点)。

本講義では、第1に日墨間の経済関係の歴史と現在の発展過程をみた上で、第2にNAFTA再交渉の論点とその背景を検討します。それを通じて、再交渉問題がメキシコや日本へ与える影響シナリオを皆さんと考えたいと思います。

12月4日(火) 第4回「日墨文化交流のパイオニア ～北川民次と佐野碩～」

講師：山本 厚子 先生

(ノンフィクション作家、元東京農業大学・早稲田大学講師)

講演概要：1910年のメキシコ革命の影響を受け、20年代にはリベラ、シケイロス、オロスコらを中心に「壁画運動」というメキシコ独自の歴史、文化を一般大衆に啓蒙する運動が始まった。

その「壁画運動」に参加した日本人画家が、北川民次である。静岡県生まれで、入学した早大予科を1914年に中退、画家を目指し米国に渡り研鑽を積む。1921年、米国からキューバ経由でメキシコに入国、リベラやシケイロスと親交を結び、「壁画運動」に参加。1925年にトラルパン野外美術学校に務め、後にタスコの児童絵画学校の校長となる。1936年に帰国し、藤田嗣治と一緒にメキシコの児童の絵画展を開催。名古屋の東山動物園に美術学校を設立し、また「北川児童美術研究所」も開設するなど児童の絵画教育に力を尽くす。後に二科展の会長になる。1986年メキシコ政府はアギラ・アステカ勲章を授与。

一方、佐野碩は、後藤新平の孫という名家に生まれたが、演劇に熱中、プロレタリア演劇運動に参加した。その後、官憲に追われ、渡米する。モスクワに渡り、現代演劇の革新者といわれたメイエルホリドに師事し、強く影響を受ける。スターリンの粛清に遭い、国外追放となり、1939年メキシコに辿り着いた。

スタニスラフスキーとメイエルホリドの演出方法を統合した技法の実践に乗り出す。大胆にもベージャス・アルテス内に個人の「演劇学校」を開設した。そして、1963年、「テアトロ・コヨアカン」が落成する。1966年61歳で永眠。メキシコ演劇に情熱を注ぎ、「演劇の父」と呼ばれ尊敬されている。

「日墨文化協定」が1954年に締結されたが、それ以前に両国の文化交流に多大なる寄与をした「パイオニア」としての2人の存在意義は大きい。両国の未来への関係を考える今、二人の存在を思い出してみたい。

以上